全体会

実践報告Ⅰ

石巻地区中高年事業団の実践

菊地　芳雄（石巻地区中高年事業団）

石巻事業団の菊地です。よろしくお願いします。北海道の地は初めてお伺いしましたので、土地の広いのと札幌市街地の仙台に劣らぬ立派なのには本当に感心させられました。

私たちの住む石巻市は、仙台より約30㎞の地点にありまして、水産と工業の発展した街でもあります。人口が12万3000人、所帯数が３万9000を擁しています。

石巻はかつて労働組合運動の盛んなところでありまして、組合に対する支配介入、あるいは倒産攻撃には徹底して闘いまして、数多くの労働債権の確保なり、あるいは工場再開、自主生産を勝ちとっておりました。そういう流れが現在もありまして、私たちのすすめている事業団・労働者協同組合の運動に対して多くの労働組合が理解と関心を示しているというのが現在であります。

石巻事業団の結成

私たちが昭和56年６月に中高年の仕事のない方の仕事を作ること、住みよい町づくりのために環境整備に貢献しようということで事業団を作りました。その当時、私は事務局長を担当しておりまして、その前は40人くらいの安田鉄工という会社の労働組合の委員長をやりましたが、200カイリの問題が発生してから会社が自己破産してしまいました。その自己破産に対する闘いとして労働者による自主生産をやろうということで闘いまして、その闘いの中では本当に数多くの経験を学びました。そのなかでとくに関心の高かったのは中高年の就労の問題でして、そのときに石巻の全日自労支部で事業団を作るという話がありまして、その話に感動を覚えてですね、自主生産の方は皆

現場の皆さんと菊地芳雄理事長（左端）

の力で操業できるようになりましたので、わたしは全日自労の事業団の運動に参加したわけでございます。

参加致しまして、事業団はつくったんですけれども、全くその当時はほかの事業団も同じだと思いますが、無いないづくしで、あるのは燃えるような熱意だけといえるような状況でした。実際組合から40万の金を借りて、仕事がありませんから働く人は２人から５人くらいで１ヶ月事業高約14、５万円。これが３ヶ月続きましたから、これでは開店休業まちがいないなというような状況だったんですけれども、いずれ事業団は社会に役立つんだというような燃えるようなものがありました。全日自労のみなさんは討議を重ねながら、１人１万円づつ出資をする、カンパをするということで、240万円の資金は確保できたわけです。

行政への働きかけ

ところが仕事の方は依然としてありませんので、これをどうするかということで討論を重ねました。中高年の仕事のない人に働く場をつくると

いうことですから、これは当然行政がやるべき仕事を私たちが代わってやってるんじゃないか。そういうことでまず市長に会って事業団に育成の立場を取ってもらうということで労働組合センターの協力も得ながら、当時の青木市長と会ったわけです。市長はえらく、歓迎するというのはおかしいんですけれども関心を持っていただいて、「君らの言っているとおりだな。やはり行政がやるということではこれまでいろいろ考えたけれども成功しなかった。あなたたちが自ら金を出し合ってやっていくということであれば、いいだろう。それでは育成の立場に立ちましょう。補助金は出せないけれども、仕事は出しましょう」と。こういうことでそれ以来、歴代の市長に全部事業団育成の流れが現在に至っているという状況です。ただ、労働組合がつくった事業団ということで市長も、仕事は出すけれども、果たして受け入れ体制ができるのか管理体制ができるのかという不安があって、厳しい意味の指摘はありました。当然、市長が育成の立場ですから私たちが思っているような形で仕事が流れるのかと思いましたら、そうではなくて、少しずつ出しながらやることを見ながらということで、こちらの方で体制をつくるのに3年かかりましたけれども、3年たってやっと石巻市の25ヶ所の都市公園がありますが、その関連の仕事を出してくれました。今はもう47公園になっています。小さな公園を合わせますと約60ヶ所ぐらい事業団でやっているということですけれども、このように公園の仕事が出てからは、本当に事業団の経営の安定化と事業高の倍増、57、8年頃から比べますと、現在7倍ぐらいになっていまして、事業高の70％～75％ですから4500万円ぐらい役所から仕事が出ているというような状況になっています。

二つの課題

ただ、石巻事業団にも2つの課題がありまして、ひとつは法人格がないということですね。それからもう一つは冬になりますとどうしても仕事が極端に少なくなりまして、団員の就労問題をどうするかという課題です。

法人格の問題は企業組合を取ろうということでいろいろ努力した経験がありますけれども、市役所の方では企業組合にしろ株式会社にしろ法人格を持つということになりますと一般の業者と同じような立場になるんじゃないか、そうしますと市として事業団を育成する根拠が失われるという話があります。実際問題石巻市の場合には小さい都市に業者が一杯いるわけですから、700万の仕事を市から取るという場合には3年かかるといわれているんですね。それは4500万も事業団が取っているというわけですから、やっぱり問題があるということです。この法人格の件につきましては、全国連合会のＩＣＡ加盟をきっかけに政府・労働省への働きかけが始まっています。何らかの法人格を国の法律で取れるように、私たちもいっしょに取り組んでいきたいと考えていますが、当面は自治体が私たちの実態を見て、柔軟な対応をしていただくようお願いするものです。

就労保障の問題につきましては、どうしてもこれは就労保障は叫ばれませんので、1人平均10日間、生活の厳しい団員はには20日ということで、やる仕事は来年度の自治体の契約が継続できる、あるいは拡大できる、そういうような役所の施設の清掃などの奉仕就労をやっています。それに対する原資は、これは夏場の、6月から10月の間に確保します。この確保というのは協同という形になるのかどうかわかりませんけれども、石巻地域の近郊ではやはり農家が多いので農業政策のひずみによって農家だけでは食べていけないという方がグループをつくってもらって、その人達の協力を得ながら夏場は相当な面積の草刈とかをし、その中で原資を確保して冬場にはそういう形で保障しているというふうになっております。

協同の輪を広げる

石巻も経営的には安定を見せておりますけれども、いずれ協同の輪を近郊に広げる、こういうふうに決意しましたのは、全国連合会で『1・2・3運動』というのがありまして、1月2月3月に

仕事の拡大と団づくりのために集中的にやるという課題がありました。東北ブロックは40億の事業高、石巻は倍増だということになりましていろいろ討議を致しました。やはり事業高の拡大、団員を増やすということは多くの人達とつながって、多くの人達に労働者協同組合の話をするということが必要だという討議になりました。石巻事業団は45名なんですが、平均年齢が66歳ということで、70歳以上が19名もいるわけですから、当然働けるうちは事業団で働いて終わったら終わりだということではないだろう。やはりそういった場合もきちんと働けるように、あるいは自分が病気になって倒れても事業団が介護の手を延べる、あるいは老人給食などもやる、こういうような対応が必要ではないかというような議論がありまして、それに対応するのはやはり高齢者協同組合だと。こういうことになってそれでは石巻周辺に９つの町がありますが、そこにそういう輪を広げようと。それからもうひとつは『病院で死ぬということ』という事業団がつくった自主映画がありますが、これは団員も言っているんですけれども人間として生きる尊厳が現れているんじゃないか。それから本当の意味での死を迎えての人間の愛というものもあるんだと。これはやはり地域の人にお話をすれば本当に皆の共感を呼ぶだろうと。こういう３つの考え方のもとに、１市９町をまわったわけです。

町村の抱える課題と事業団への期待

まわってみて驚いたんですが、高齢者の話、労働者協同組合の話をしますと乾いた土地に水をやるようなものでどんどん話が吸い込まれて本当に関心を呼びました。そのなかで石巻市近郊に河南町役場がありますけれども、ここは人口18,394名、65歳以上18.2％で、寝たきり老人が60人、一人暮らしが155人もありまして、福祉対策が非常に急がれている町なわけです。助役さんも含めて担当課長も事業団の話には、町役場の方で活性化につながることだと。福祉政策ゴールドプランを町役場で作成したけれども、本当に住民に密着できるような案というのがなかなかできないんだと。ところがこの労働者協同組合と高齢者協同組合の話をきいてこれがやっぱり政策を実現できる要になるのではないかと、そういうわけでは話だけではなくて資料を送って欲しいという積極的な姿勢が見られました。とくに町会議員の阿部副議長という人は本当に労働者協同組合の話には感銘したというんですね。「わかった。本当に素晴らしい。私も手伝う」と、こういうような話をしながら、やはり働くということは必要なんだ、これを町民に認識させるために町政だよりに出しましょうと。それからもう一つは町の福祉事業もこういう観点からすると本物ではないから、これは労働者協同組合で話しているような形で審議してつくり

民間の側溝掃除

市役所発注北上公園の草刈

直すと言い切っておりました。さらに原という町会議員がおりましたけれども、『病院で死ぬということ』の話を聞いて、「これがこれから後最も重要な課題だ。このことを町民に認識させる必要がある」ということで「町役場の広報に出す」ということを言い切っているわけです。そういう話の経過をみまして町村の方では対策について非常に苦しんでいる。町の活性化につながるのはこれだ、ということで本当に自分たちも確信を持ったしだいです。

それが終わりまして女川町にも行きましたが、ここも大体いまいった河南町と同じような内容です。ここは原子力発電のあるところでありまして、助成もあって町の財政は比較的豊かなんですね。しかし高齢者の問題だけは金には関係なく出てきてますし、この対策はそう簡単なものではないといっていました。それから特に若い人達が定着しないという問題があって、町の財政でもって若者を定着させるための研究をする機関をつくるという話になって、その時に事業団の話、全くそうだなと、だからこれからも女川に来て話してくださいといっていました。仕事についてはどこの町村もそうなんですけれども、町の関係ばかりではなくて、牡鹿・桃生という二つの郡に跨っているここの町村協議会があって、そこで話をして確認が取れればお墨付きをもらったような形で出せるから、という須田町長の話があって「もし君達がそこにいくのであれば私が強力な人を知っているから紹介します」とたいした激励をうけました。とくに事業団が自分たちのことだけ、市のことだけ考えないで、多くの町村を歩くということは本当に考えられないことだ、すばらしいことだと、何か代表したような形で私たちにお礼をされたわけですね。

矢本町に石巻事業団支所が

私もそういう思いを受け止めながら、最後に矢本町の話をして終わりたいと思います。そういうような形で矢本町にいきまして、いろいろ行政ともお話しました。その中身は、大森町会議員という方がおりまして、この方は13年間もかかって矢本の町役場の方に高齢者が就労することを訴え続けてきたわけですね。それで町としてもそのとこはやりましょうということで何回もつくったけれども立ち消えになったり、そのままになったという形で成果を期することはできなっかたといっていました。その自宅に連合会の副理事長の永戸さんと事務局長の奥さんと私たち役員と含めてお伺いしたんですけれども、非常に永戸さんからのお話に感じいって2時間半も熱論を闘わせながらそうだなと、それではとにかく役所の方にきちんとそういう政策が取れるように、事業団のことも話がきちんできるように紹介します、そういうことで話をしていました。特に関心を受けたのは、やはり農家の方では後継者がいないということと、それから畑が荒れてしまって当然耕すこともできませんからたいへんだと、事業団でもし土地を借りるんであれば、お貸しして、無農薬の農業をやったり老人給食をやったりするのであればお手伝いをしたいという話もありました。すっかり喜んでとにかく身が軽くなった、これならなんでもやれるんじゃないかということで、その場は終わった経過があります。矢本町の方はそういう流れでいろいろ話がありまして、その席にも連合会の永戸さんなど参加しました。桜井助役と矢本町の政策を担当する菅原課長と福祉課長を含めて数人参加したんですが、特に代表格の菅原課長さんからは事業団を矢本でつくりたい。つくるについては

6人乗り2tトラックを運転する75歳の田中さん（右側）64歳の斯波さんと大沼さん

どうすればいいんですかとたずねられまして、永戸副理事長から「作るんであればやはり広域的に作るべきだ。広域的に作るということは人も物も融通がきいて効率的になるわけですよ。石巻事業団の支所というかたちで矢本に作ったらどうですか」との話になりまして、菅原課長も「私もそう思っていた」ということで今度矢本に石巻事業団の支所ができることになります。その時永戸さんの方から、「矢本ということだけでなくて矢本の方から町村協議会のなかに提起すれば、最初は高齢者の特別対策だということで、各課から少しずつ仕事はくるものであるから、これを積み重ねの実績の中でやっていけばいずれ大きく仕事をつかまえられるんですよ」という話をしたら、やっぱり役所の方でも「ああそうだったね。そういうことですね」と頷いていました。特に永戸さんからは、高齢者が主人公となる高齢者協同組合を作り発展させていくということであれば、生きがいをもとめている人達も含めて豊かな高齢期を迎えることができるんではないでしょうかという話には、本当にみんな共感を深めました。大きな成果があったと感じております。この一連の1市9町に広める闘いで感じたことは、本当に協同という事を語るということがこんなに多くの人達の共感を得るという事を目の当たりに見て、運動に対する確信が深まりました。そういう意味でこれから決意も新たに頑張っていこうと考えております。

最後の最後になりますけれども、石巻の近郊に万石ベイパークという会社がありまして、今度2万坪の土地に大きな遊園地を作るということで約30億をかけて7月半ばにオープンすることになっています。この会社と事業団はおつき合いがありまして、今度その仕事を取るということで連合会からは永戸さんとセンター事業団から関谷さんがまいりましてうちの方と三者一体になって仕事を取るための話をすすめております。私も協同というのは内も外もあるんだなという感じで、本当に連合会・センター事業団、それから地域事業団一体になってやるということはどんなに心強い感じ、また団員が成長していくことにつながるなという思いです。これから決意も新たに頑張ることを報告しまして、簡単ですが終わります。ありがとうございました。

参加者の感想

室田恵　大学生協北海道事業連合

チラシを見てとても楽しみにしていての参加でした。様々な分野の方々の報告を聞き、生協職員として、労組の役員として、又地域に暮らす一人の人間として、大変勉強になりました。全体会での菊地氏の報告に、感激し、吉野氏の報告に道東で生まれ育った私には、母が昔関わっていた婦人会の活動と重なり、今後益々の発展を願わずにはいられません。分科会では手島氏の報告が、まるで今勤めている事業連合のことをいわれているようで、とても興味深かったです。

○実行委員会の皆様、本当にご苦労さまでした。受付、進行、昼食、会場移動などスムーズに流れ、ただ個人的にはちょっと詰め込みすぎのような気もしました。報告者を減らして一人ひとりの持ち時間を長くし、余裕を持たせるともっと良いようにも思えました。

佐藤佳世　コープさっぽろ

全体的に、興味深い内容で、変に難しすぎたり堅苦しい内容でなく、楽しく聞けました。心に残ったのは、上からの押し付けではなく、自らが欲したことをやり遂げたり、活動しているという印象を受けたことです。組織としての協同組合は、それらの人々の手助けという立場を守る必要があると思います。協同することで、自らの意見が実践されていくということが、もっと理解されれば、協同の思想が広まる気がします。

○午前中の報告がもう少し時間割当てを厳密にして欲しかった。最後の人が、帳尻合わせで、満足な発表ができなかったのではと思いました。